

解説 アドルフ・Dとの徒歩旅行

宮下 啓三

これは、スイスの作家による小説です。スイスの画家と過ごした一日のできごとを語ります。

スイスが「アルプスの国」であると思うのは日本人ばかりではありません。スイスの作家が書いた小説と聞くと、アルプスが舞台になっているのだろうと思うのは、外国人に共通する現象です。でも、アルプスと呼ばれる山岳地帯が現在のスイス国家の全体に占める割合は六〇パーセントほどであって、スイス人のすべてがアルプスに生まれたり住んだりしているわけではありません。そして、スイスの風土の魅力はアルプスでない場所にもたくさんあります。この小説の舞台は、アルプス山岳地域の北側の、低い丘がゆつたりと起伏する土地です。

スイスの東北地方は北でドイツ、東でオーストリアと接しています。ドイツとの境の一部がボーデン湖という名の大きい湖の中にあります。その湖の一部分がウンターゼーと呼ばれています。アルプスの山中から流れてきたライン河の水は、いったんボーデン

湖に入ったあと、ウンターゼーの西の端からふたたびライン河に流れこみます。ボーデン湖全体の中で下流にあたるので「下の湖」という意味の名をもつことになりました。

このウンターゼーの湖面は海拔三九六メートル。湖面から七〇メートルほど上に小説の主人公である画家の家があります。そこから南、一〇キロメートルほど離れたところ、海拔四〇〇メートルほどの高さに、フラウエンフェルトという名の地方都市があります。人口二万人ほどのこじんまりした町ですが、れっきとした州庁所在地である都市です。

画家の家からフラウエンフェルト市まで往復する旅を語るのが『アドルフ・ディートリッヒとの徒歩旅行』です。出発点と目的地の高さがほとんど同じなのですが、北から南へと進む徒歩旅行は、東西方向につらなる丘陵をいくつも上り下りするものとなります。

作者の名はベアート・プレヒビュール。一九三九年に生まれたスイスで名の知られた作家です。プレヒビュール自身は「詩人」と呼ばれたがっているようで、詩人である翻訳者と国際的な交流をおこなっています。一方、小説の主人公であるアドルフ・ディートリッヒは、実在した絵描きであって、ウンターゼーに面するベルリンゲンという町で一八七七年に生まれて、一九五七年にそこで一生を終えました。

小説の中で画家が七十二歳と言っていますから、一九四九年の年の十一月の徒歩旅行

だったのでしょうか。

ディートリッヒは、小鳥やニワトリ、ウサギやモルモットなどの小動物、ウシやヒツジなどの家畜、そして花や草木を描いた画家としても知られますが、動物や草花以上にこの画家の大事なテーマは、ウンターゼーの湖岸の風景でした。一九二二年にドイツのマンハイムで大規模な個展が開かれて名をあげたのち、美術愛好者たちのあいだで知られる画家となりました。小説中にマンハイムの他にミュンヘンなど、ドイツの大都市の名が出てきます。いずれもディートリッヒの絵が陳列されたことのある都市です。

この小説は、画家がなぜこのようなものを描きつづけたのかという疑問に答える作品になっています。作者は久しい以前からこの画家に関心を寄せていて、滋味あふれる絵を好んでいました。そして画家自身の人となりと生活に深い興味を寄せつづけてきました。画家の住んだ土地に足をはこんで、画家が生涯の大部分を送った土地の風景の中に画家をよみがえらせてみようと思いました。画家が、何を見、何を考え、どのように生きていたか、という問いに答えを見出そうとした結果として、この興味深い小説が生まれました。

この小説の舞台、つまり徒歩旅行の土地は、トゥールガウという名の州の農村地域です。時計などの精密機械の産地であるスイス西部とは対照的に、トゥールガウ州は、今でこそ近代的な工業が進出する土地に変貌しつつ増えてきましたが、もともとは農業と牧畜の土地として知られていました。時計産業に縁がなくて、農業がさかんであったせいか、スイス人たちの間で、トゥールガウの住人達は時計をもたないとか、待ち合わせにしても約束の時刻に会えたためしがないというような笑い話があります。農村地帯の人々は、日の出日の入り、雲や風など、自然現象を時計代わりにしていたのでしょうか。この小説でも時刻にこだわらないトゥールガウ人気質がうかがえます。

徒歩旅行する老画家と「私」が、フラウエンフェルト市の手前でトゥール川を渡りますが、トゥールガウとは「トゥール川の流域」という意味であって、水利が良いので土地が肥えていて、農業に適した土地であることを示す地名です。（翻訳者が「トゥール」を避けて「ツール」としているのは、発音しづらい書き方を避けようとする配慮によります）

この小説の中でブドウ畑のことが語られます。トゥールガウ産の白ワインはスイス国内だけでなく、国際的に評価の高いワインです。「ミュラー・トゥールガウ」という名が添えられた白ワインが作られています。トゥールガウ産のブドウをミュラーという人が品種改良して生み出したブドウで作ったワインであることをあらわす銘柄です。この小説でも「白ワイン」が小道具となっていることにお気づきください。小樽や甲州など、

日本で産出される白ワインにこのブドウ品種によるものがあります。

第一次世界大戦と第二次世界大戦の時期、国境に近いということは戦争による緊張が強かったことを意味します。その緊張状態が小説の中で語られます。画家が国境警備に駆り出されて長いこと不自由で緊張にみちた時期を送ったと語ります。何しろ、湖岸の北側に見える対岸の土地はドイツなのです。ディートリッヒの記憶に二つの世界大戦の時期のことが刻み込まれています。永世中立国として平和を守ったと言われているスイスですが、近くの町では、第二次大戦中にドイツ領と見誤ったアメリカ空軍機が誤爆して人身被害を生じたことがありました。

七十二歳になった画家を訪ねて、徒歩旅行に付き合う「私」の目に見え耳に聞こえたことがらが小説を形成しているというわけですが、なぜ昼間の長い夏でなかったのでしょうか？ あるいは、あたたかい春か秋の日のハイキングでないのでしょうか？

日本の最北の地である北海道の北端よりもさらにずっと北に位置する土地の十一月は、青空を見る日が少ないだけでなく、日が短くて、暗い印象がまさる時期です。冬の寒さが身に沁み始めます。まだ暗い朝六時半の出発。いかにも早起きの習慣が身についたスイス農村住民らしい出発時刻です。そして目的地のフラウエンフェルトに達した時はもうすっかり暗くなっています。

画家ディートリッヒの代表作とされる、一九四一年に描かれた「ベルリンゲン近くの急傾斜の湖畔の冬景色」という題の油絵が、この小説の舞台となる土地を知るのに役立ちます。静かな湖面と薄青い空が二筋の水平線となり、淡い雪で白い湖畔と対岸の二筋の帯と重なり合っています。雪が積もらないほど急な崖の斜面の樹木、湖畔に点々と立つ枯れ木の茶色が垂直方向の帯を形成します。白と青と茶の三色が生み出す静かなハーモニーは、人間社会のできごとを知らないかのごとくです。画面の左隅に小さくシカが一頭。一九四一年が第二次世界大戦中の年であり、湖面の向こうのドイツ領土が戦争当事者の国であるという事実を超越した風景画です。

地元の農家に絵を売って生活費の一部をかせいでいた画家にとって、農繁期は孤独な時期であるのでしょう。農民たちは忙しくて絵描きにかまっていられません。冬籠りする前の時期であれば、農民たちに画家の話し相手となる余裕ができるでしょう。都会人がハイキングとかピクニックなどと呼ぶ徒歩旅行ではありません。そんな徒歩旅行に同行するという設定によって、作家プレヒビュールは、農村画家の生活と心理を探求します。この小説の魅力と面白さがここにあります。

スイスは、深層心理学と精神分析による治療法の先進国である、という側面をもっています。作家の父親は精神医療の現場で働く人でした。プレヒビュール自身は、印刷

技術を学んでから少年少女向きの雑誌の編集者を経て編集業務の経験を積み、かたわらヨーロッパ諸国を旅して見聞を積んだあとで作家になりました。本格的な作家活動の開始は一九七三年だったそうです。画家はすでにこの世を去っていました。プレヒビュールは想像の中で画家の生きた時代に自分を移して、農村に生きた画家を自分の心の目の中によりみがえらせてみようとしたのです。

スイス人によるスイス探求のころみの面白さを味わうこと。それがこの小説を楽しむ最良の方法です。そう思う私ですが、訳者から翻訳原稿のコピーを見せていただいた時、第三章に「携帯電話」が出てくるのにびっくりして、訳者の勘違いによる誤訳でないのか、と思いました。訳者が示してくれた原文は、たしかに「携帯電話」という言葉を含んでいました。私はわけがわからなくなりました。画家の生きた時代にそのようなものは影も形もなかったからです。そのあとで画家と「私」がタクシーで帰路につきますが、タクシーの運転手が妙なことを言います。タクシーの乗客は「私」一人だけであつて、老いた画家の姿が見えていないようです。

なぜ、よりによって十一月月上旬なのか、という疑問がこの謎を解く鍵を提供してくれていました。

十一月二日はキリスト教の暦で「万霊節」の教会行事の日とされます。故人となった信徒の霊に祈りを捧げる行事です。地域によって異なりますが、十一月二日以降の日に、住民による行列などの祭事がおこなわれることがあります。その時期に立つ「市」にメリーゴーラウンドや射的などの施設が組み立てられて賑わうさまは、地方都市の風物詩と呼ばれてきた情景です。「市が立つ日」とアトラクションに老画家の少年時代の記憶が宿っています。そして、「化け物めぐりコースター」と呼ばれる、日常生活を超えるものたちの世界を束の間にめぐるアトラクションを楽しんだ後、「携帯電話」によって話をする人々が目にうつります。もちろん、画家の生きた時代に存在していなかったものです。人々が電話で話すさまは、近くににいる人との会話とは大違いで、まるで目に見えない者と話しているかのようです。この時点で、「私」は現代に戻ってきています。画家の姿は「私」にしか見えていません。いいえ、そもそも徒歩旅行のあいだ、同行者である「私」の姿が、画家と出会う地元の人たちに見えていたのかどうか、ということさえおぼつかなくなります。

「万霊節」が故人を偲ぶ日であるということから連想された、過去から現在への切り替わりの後、画家の姿はこの世から消えてしまっています。タクシー運転手は「私」だけを乗せて走っています。タクシー運転手の目に画家の姿が見えません。「私」と運転手の会話がかみ合わないのはそのためです。

作者は画家の生きた時代にさかのぼって空想の徒歩旅行をおこなったあと、最後に至って画家を死後の時代である現代に誘い入れたのでしよう。

何となくヘルマン・ヘッセが『荒野の狼』という小説で、スイスの大都市を舞台として今は亡きハリー・ハラーの生活を再現した末に魔法仕掛けの劇場の場面で話をしめくくったのと似ているような気がします。単純な徒歩旅行と思いきや、過去と現代を結ぶ想念の旅であったというところに、この小説に込めた作者プレヒュールの意図と意欲が感じ取れるように思えます。

慶應義塾大学名誉教授（ドイツ文学）